

物語型権力と交渉的解読空間 ——教育世論の脱物語化にむけて——

Negotiative Decoding Space against Narrativated Power: Toward De-narrativation of Educational Public Opinion

加藤隆雄・酒井真由子

Takao KATO, Mayuko SAKAI

要 旨

教育報道がどのように教育物語を構成するか、概要をまとめたのちに、教育物語が集散的記憶として教育世論を形成していることを述べる。このような世論形成の仕方は、従来のように世論形成としてではなく、物語権力の作用として捉えるべきであり、それに対抗するためには、ホルンの三つの解読類型を参照しなければならない。一見、「対抗的解読」が有効な方法であるように思われるが、物語の否定として、物語の重力圏を脱することができない。解読のもう一つの類型である「交渉的解読」こそが、教育物語を脱物語化する有効な方法である。交渉的解読は、ヘゲモニックな解読を、ずらし異化しパロディ化するものである。そのようなメディアとして、インターネットの諸使用法が存在している。テレビの教育報道における物語が、ずらされて物語の体裁をとらなくなってしまった事例をいくつか取り上げ、交渉的解読空間としてのインターネットの脱物語化機能を論じる。インターネットに対して様々な批判はあるが、その空間は異質性をもった複数の「声」が存在する場であり、また情報の蓄積と参照が容易に行われる場である。脱物語化機能を十分に果たすためには、インターネットには交渉的解読が保証される空間としてのアーキテクチャが必要であることを論じる。

1. 教育物語の生成と世論形成

教育報道が、教育事件を擬似出来事として、いかにヘゲモニックな解読対象とするかについて、筆者らは、教育物語¹⁾の生成という観点から理論的な分析を行った（加藤・紅林・越智・酒井2016）。これにかかわる機制は、次のように整理される。

- （1）視聴者側の地位変化。視聴者は、教育報道においては、受動的な視聴者から「有識経験者」へと秘かに地位上昇をする。なぜならば、政治や経済や事件・事故・災害とは違って学校や子どもの教育については実際に十分な経験と知識を有していることが多いからだ。

- (2) 教育報道への巻き込み。視聴者を報道へと「参加」させるため、テレビ上では諸種のギミック（テレビの中の擬似視聴者、マスキングのテクニックなど）が用いられる。また、視聴者に記憶を想起（Fiske and Hartley 1978）させる各種儀礼（一般的な学校の映像・音響効果、過去の事件の映像、年表など）²⁾が用いられる。
- (3) 教育報道に含まれる物語的連鎖の了解作用。類型化された登場人物、類型化された事件、類型化された出来事の連鎖。教育事件が、悪代官に対する勧善懲悪的なストーリーや、失われた宝物を取り戻すための苦難の物語として語られる。
- (4) 忘却の作用。事件の細部は忘れられ、カタルシス体験とその記憶のみが後に残る。

「事件」といわれるものは、多くの関係者が、多くの動機連関・意味連関のもと、複雑な時間構造の中で、複合的な行為をし、事後的に多様な解釈を許す重層的な可能態である³⁾。しかし、『ユリシイズ』や『藪の中』のようなものがテレビ番組で提示されるわけではないことは確かである。テレビ報道（特にワイドショーの教育報道）は、物語を語る「公平無私の第三者」の視点で事件を語る。その視点自体は、語りを聞く人々（視聴者）にとって意識化されにくいものであり、その視点からは、複雑な人間性と動機の連鎖、多元的な人間関係・利害関係、錯綜する前後関係と複雑な出来事連鎖は、類型化された物語要素へと整序されてしまう（北澤 2015 の指摘を参照）。確かに、テレビ報道の限られた時間では、複雑なものは正確に伝えられないし、複雑な関係を短時間で視聴者に理解させることは不可能である。さらに、視聴者が有識経験者である以上、彼らを納得させるには、断片的な事実以上のものが必要である。それゆえ、教育報道は、類型化された人間像・人間関係、類型化されたストーリー展開を持ち込んで教育事件を語る。こうした教育報道の特徴は、テレビに課せられた条件から生じるといえるが、このことに別の効果はないのだろうか。

モーリス・アルヴァックスは、デュルケムの集合意識の概念を発展させた「集合的記憶」について考察をしている（Halbwachs 1950）。個々人の記憶は、共同体の記憶の記憶に格納され、あるいは引き出されるが、そこでは記憶（mémoire）は「思い出（souvenir）」として共有されることになる。このような思い出は、知覚の連鎖ではなく、自伝的記憶やエピソード記憶であり、事象や出来事連鎖についての類型化されたパタン、すなわち物語構造を有することになるといえよう。集合的記憶論を出発点にして国家や民族の「捏造された記憶」を検討する研究（代表的なものとして Anderson 1983; Assmann 1999）もまた、国家と民族の物語の生成を述べていることになる。

こうした観点からは、教育報道における教育物語は、視聴者にとっての集合的記憶を作り上げることに貢献しているということが言えるだろう。それらは、単純化され単一の視点からの物語として視聴者に提供され、視聴者にカタルシスをもたらす。しかし、すぐに視聴者の関心は別の報道に取って代わられて、物語の細部は忘れられて、物語の骨組みとカタルシスの経験だけが残る。物語は、ステレオタイプの構造を持つため、事件の誇張された枠組が視聴者に共有されることになる。視聴者は、「視聴者共同体」（酒井・越智・紅林・加藤 2016）として、この物語構造を共有する。教育物語は、このようなかたちで教育世論の形成に貢献すると考えられるのだ。外的な情報環境の縮約＝単純化と特徴の強調＝歪曲の作用としてのステレオタイプが、事実を一定の仕方で見せるものとしての政治的意味作用、世論形成作用を有していることは、リップマンが示したことであった（Lippman 1922）。

2. 物語型権力と交渉的解読空間

このように、教育物語は、ステレオタイプやプロット構造として、集合的記憶を形作り教育世論の基礎を提供する。教育に携わる多くの人々の様々な立場と関係、教育現場で起こることは、一方的な視点で類型化され、わかりやすい物語に仕立てあげられる。プロクルステスの寝台がここに横たわり、錯綜し絡み合った諸事象や関係も、あらかじめ用意されたステレオタイプとプロット構造のうえで断罪される。学校と教師が相変わらずのことをやっているのは、物語が相も変わらずのものだからだ。

物語が、このようにして視聴者の集合的記憶を作り、教育世論を作っているとしたら、物語を通して働く権力作用をここに指摘することができるだろう。本稿では、これを「物語型権力」と呼びたいと思う。マスメディア、特にテレビの教育報道は、教育世論の形成に対して、物語型権力として作用しているということになる。フーコーの生権力の理論（Foucault 1994）以降、権力を、行使する主体による強制と支配として捉えるのではなく、様々な装置を介して微細なレベルにおいて働く力として捉えることができるようになった。これらの力を可能にするのは、社会の中に張りめぐらされた諸装置なのであり、常時意図的な強制力を加えることなく、力は装置を通して自動的に働くのである。したがって、これらの装置の総体は、「アーキテクチャ」（Lessig 2006）と言い換えることもできるであろう。そうした観点を採ることによって、教育世論の形成を、情報操作・世論操作として捉える視点から自由になれる。現代日本において、報道規制や放送に対する圧力は、それに対抗する言説を生み出すことができる（たとえば、永田 2014）。しかし、物語による場合、それらが操作であるとは感じられず、それによって物語は批判を免れるのである。

教育世論が物語を通して形成され、批判的検討を受けないとしたら、教育現象は多くの人々にとって物語の領域に属することになる。テレビの前の数百万人の有識者の知識は、物語的改変を受けた集合的記憶にストックされる。現場に関与する人間の性格の誇張と歪曲、現場の人間関係のステレオタイプへの要約、様々な要素の意図的な取捨選択などを問題化するためには、物語型権力に対する対抗手段、「脱物語化」が必要になる。

脱物語化にはどのような方略がありうるのか。視聴者が視聴者である限りにおいて、何らかの物語化は避けられないように思われる。一つの物語を脱物語化するためには、それと対抗する別の物語を導入することが必要ではないのだろうか。たとえば、いじめを受け自殺した生徒を悼み復讐する者の視点ではなく、本来的にあるべき秩序を攪乱しようとする者を排除することに成功した者の物語や、意図しない行為により相手を死なせてしまった者の悔恨と贖罪の物語、あるいは同情的な行為をしたにもかかわらず人を死なせたと名指された者の冤罪に苦しむ物語などを。こうした対抗物語が、既存の教育物語のヘゲモニーを減殺するのではないだろうか。しかし、先に述べたように物語は、支配者による情報操作・世論操作ではない。むしろ、物語は民衆的なものである。ヘゲモニックな物語に対して、批判的に対抗することによって脱物語化は成し遂げられるのだろうか。

この点に関して、前稿と同様、スチュワート・ホールが提起した三つの解読（decoding）の類型を踏まえておく必要があるものと思われる（Hall 1980; 佐藤 1990; 山脇 2012）。ホールは、受け手の解読類型として、①ヘゲモニックな解読（受け手は送り手の意図通りに情報を解読する）、②交渉的な解読（受け手は送り手の意図とは無関係な意味連関を発見して、それによって新たな解釈を作り上げる）、③対抗的な解読（受け手の意図に対して、それに対立する観点から解読する）を挙げ

た。①にあたるのは、テレビの視聴者が、教育報道、を示された通りの物語構造のまま受け取ることである。上に述べた物語的対抗は③にあたるのであり、ヘゲモニックな解読に別の物語を対置することである。しかし、「対抗的解読」は、ヘゲモニックな物語の中で支配的だった価値に対して従属的に扱われた価値による転覆を目指すために、一つの争奪物をめぐり前者と土俵を同じくすることになる。それゆえ、脱物語化をもたらすかに見えて、結局は前者の否定の物語、逆方向からの物語が語られることになり、前者の物語の重力圏を脱することができない。ヘゲモニーの否定という意味でヘゲモニーの汚染を免れ得ないということになる（こうした問題については、Derrida 1967a; 1967b; 1967c を参照）。

他方、②「交渉的解読」は、ヘゲモニックな解読を、ずらし異化しパロディ化するものである。物語を物語ではなく別のものにしてしまうような読みであり、ヘゲモニックに統合され中心的価値への収斂傾向をもった現実解釈を、（再び）多元的な諸現実へと戻すことである。こうした脱中心化は、価値にもう一つの中心を作って全体を楕円化するのではなく、多数の焦点へと超楕円化していくことである。こうしたあり方こそが、現代社会における多視点性、（非和声的）多声性、異質混在性に呼応するあり方ではないかと思われる。

実際、現在、ヘゲモニックな物語に対する批評的なメディアとして、インターネットの諸使用法が存在している。インターネット上に存在する異質性をもった複数の「声」、情報ネットワーク（関連するニュースや検索可能な情報、利用者による書き込みなど）は、交渉的解読をもたらすものであり、それをここでは「交渉的解読空間」と呼ぼう。

次節で、インターネット空間が脱物語化をいかにして可能にするかについて検討するが、近年の調査（NHK 放送文化研究所 2016）では、テレビ視聴率とインターネット使用については明確な年代差が存在していることが示されている。ただし、数字として表れないが、インターネットを「テレビのように」使用している人々の存在にも注意しないといけない。実際、インターネットの動画ニュースは、好きなどきに関心のあるものを選んで見られるテレビのニュースである。ただし、一般的にはインターネットをテレビのようにだけ使用することは難しい。たとえ、ある意図をもって選択されて並べられているものでも、同じ画面上には関連するニュースが、それに対する反応（投稿）が、意識調査や連想的記事のリンクが多数存在している。

インターネットの功罪、あるいは特に弊害についての指摘が、数多く存在することも確かである。ただ、教育物語が教育世論を構築している、ということの問題性からすると、インターネットは、教育物語と教育世論の外部（counterpart）⁴⁾になりうると本稿は考える。そのような使い方を導く制度設計こそが、交渉的解読空間のアーキテクチャということになる。

3. 「自分の子どもの入学式出席のために担任生徒の入学式を欠席する教師」および「のど自慢に出場するために参観授業を欠席する教師」をめぐる物語と交渉的解読空間における脱物語化

以下で検討するのは、「教育事件」をめぐって形成される言説空間（語り手と聞き手と物語が含まれる）と、それに対して外部（交渉的解読空間）から働く言説的作用である。この空間では、テレビの教育報道における物語が、ずらされて多様な解釈と文脈のもとに置かれ物語の体裁をとらなくなってしまう。また、物語の諸要素が別の文脈を与えられたり、要素が別のものに取り換えられたり、筋が逆転・逸脱したり換骨奪胎されることがありうる。こうして、交渉的解読は、ヘゲモニッ

クな解説の前提する諸価値に汚染されることを回避しうる。ここでは、教育物語がその外部によって換骨奪胎されていく事例を挙げてみることにしよう。

【事例 1】高校教師が担任する生徒(新高 1 生)の入学式を欠席して、自分の息子の入学式に出席した。(2014 年 4 月 14 日～4 月 20 日に報道)(酒井・越智・紅林・加藤 2016)

この件を報道したワイドショー番組のシークエンスを表 1 に、そこで用いられた視覚的聴覚的效果については表 2 に示した。表 3 は、別の番組(他局)の視覚的聴覚的テクニックである。

入学式というものを再現するシークエンスに、そこに重要な要素(担任の教師)が不在であることが示される映像が挟まれる(表 2)。さらに、その行為に対する複数の反応(学校関係者、担任クラスの生徒と親、インターネットへの書き込み、第三者のインタビューなど)が続く。そして、スタジオでは出演者から賛否両論が出される(表 1 37)。別の局のワイドショーでも取り上げられ、皮肉な映像を付される(表 3)。

これについて、Yahoo! ニュースの意識調査(2014 年 4 月 12 日～2014 年 4 月 22 日)(<http://polls.dailynews.yahoo.co.jp/domestic/11262/result>)で、一般のユーザーから、やはり賛否両論が寄せられる(問題だと思う…44.4%, 問題だと思わない…48.0%)。インターネットの反応も賛否両論があった。

このケースでは、教育物語はヘゲモニーを獲得することができなかった。つまり、他者に尽くすべき聖職者が本来の職務をなげうって自分のために行動したことで、大切なものが失われてしまっ

表 1 報道シークエンス(テレビ朝日『モーニングバード』「賛否 新 1 年生の担任が入学式休み息子の入学式出席」)カット別データ(2014 年 4 月 15 日, 8:13～8:30)

	番号	カットの概要	誰が	どこで	何を
概要の 説明、 問題提起	1	スタジオ, 鳥羽, 赤江, フリップボード(仕事欠席/家族出席)	赤江	スタジオ	—
イン タ ビ ユ ー ・ 会 見	2	中年男性の街頭インタビュー, リポーター	中年男性, リポーター(所太郎)	街頭	発言・返答する(生徒最優先)
	3	中年女性と若い女性の街頭インタビュー	中年女性と若い女性	街頭	発言・返答する(自分の子ども優先)
	4-5	埼玉県教育委員会教育長会見	関根郁夫教育長	室内	発言・返答する
概要の 説明	6	校舎と桜	****校舎, 桜	学校の 昇降口	—
	7	自転車と自転車置き場, 「入学式を欠席」	****自転車, 自転車置き場, テロップ	自転車 置き場	—
	8	校舎と桜, 「入学式を欠席」	****校舎, 桜	学校	—
	9	入学式(体育館), 「息子の入学式があるため」	****体育館	体育館	—

概要の説明	10-11	埼玉県議会 江野幸一議員会見	江野幸一議員（来賓）	室内	発言・返答する
	12	息子の入学式と教え子の入学式のイラスト	****イラスト	—	—
	13	埼玉県教育委員会教育長	関根郁夫教育長	室内	発言・返答する
	14	校舎	****校舎	—	—
	15	女性教師からの手紙	****手紙	—	—
	16	入学式（体育館）と女性教師の手紙の一部のテロップ	****生徒	—	次々立ち上がる
	17	入学式（生徒の手元）と女性教師の手紙の一部のテロップ	****生徒	—	座って紙をもっている
	18	入学式（保護者）と女性教師の手紙の一部のテロップ	****保護者	—	壇上を向いている
	19	埼玉県庁	県庁	埼玉県庁	—
	20	埼玉県庁（看板）	看板	埼玉県庁	—
問題提起	21	街頭で街の人が「あり、なし」ボードにシールを貼る様子	街の人	街頭	シールを貼る
	22	中年女性2人の街頭インタビューの様子	中年女性2人	街頭	発言・返答する
	23	女性の街頭インタビューの様子	女性と男の子	街頭	ボードを見ている
インタビュー・会見・各メディアによる意見	24	60代男性、女性街頭インタビュー	60代男性、女性	街頭	発言・返答する（仕事優先）
	25	60代女性2人街頭インタビュー	60代女性2名	街頭	発言・返答する（仕事優先）
	26	同上	同上	街頭	発言・返答する
	27	40代女性街頭インタビュー	40代女性、子ども	街頭	発言・返答する（どちらともいえない）
	28	60代男性街頭インタビュー	60代男性、女性	街頭	発言・返答する（どちらともいえない）
	29	同上	同上	街頭	発言・返答する
	30	30代女性街頭インタビュー	30代女性	街頭	発言・返答する（自分の子ども優先）
	31	尾木直樹と羽田亮介の写真、「教育関係者の中でも賛否両論」	尾木直樹、羽田亮介	—	—
	32	60代中学校の元教師	60代中学校元教師	街頭	発言・返答する（仕事優先）
	33	教育評論家尾木直樹	尾木直樹	室内	発言・返答する（仕事優先）
	34	埼玉県高等学校教職員組合羽田亮介書記長	羽田亮介	室内	発言・返答する（自分の子ども優先）

各メディアによる意見・インタビュー・見	35	入学式（体育館）（埼玉県によると同様の理由で3人入学式欠席）	****体育館	—	座っている
	36	埼玉県教育委員会教育長	関根郁夫教育長	埼玉県庁	発言・返答する
意見・議論 スタジオでの概要の説明、	37	スタジオでのトーク。以下、省略。 （鳥羽・赤江（キャスター）、所太郎（リポーター）、コメンテーター3人。街の声をまとめたフリップボード、街頭インタビューでの「認められる、認められない、どちらともいえない」のボード、教育長の話をまとめたフリップボード、など）		スタジオ	

- ・ニュース映像をデータ化するにあたり、個々のカットを最小単位とした。カットとは「被写体が存在する空間の時間的・映像的に断絶のない映像」（吉田 2008）のことである。
- ・本表は、吉田（2008）の映像記録方式の基本構造を参考にした。「カットの概要」とは各カットの内容を一読しただけでわかるようにまとめたものである。また「誰が / どこで / 何をしたか」の3点に着目して、映像の基本的な内容を記録した。
- ・映像が人間ではなく「もの」である場合には、「誰が」の欄にマーク（****）をつけた。

表2 報道シークエンスにおける視覚的・聴覚的効果のテクニック（テレビ朝日『モーニングバード』「賛否 新1年生の担任が入学式休み息子の入学式出席」）

画面右上のテロップ：賛否 新1年生の担任が入学式休み息子の入学式出席			
番号	語り	ヴィジュアル構成	テロップ
6	ナレーション：埼玉県の県立高校で新1年生の担任となった50代の女性教師が	桜に焦点が当たっていたのが、校舎に焦点当たる	埼玉県の県立高校で新1年生の担任 50代の女性教師
	ナレーション：入学式を		入学式を欠席（真ん中に縦書で斜め）
7	ナレーション：欠席していたことが発覚	自転車置き場に自転車が並んでいる	埼玉県の県立高校で新1年生の担任 50代の女性教師
			入学式を欠席（真ん中に縦書で斜め）
8	ナレーション：その理由は	校舎の前の桜に焦点	埼玉県の県立高校で新1年生の担任 50代の女性教師
			入学式を欠席（真ん中に縦書で斜め）
9	音：トウトウトウトウ…	体育館での入学式の様子（ぼやけている）	息子の入学式があるため（真ん中）

表3 報道シークエンスにおける視覚的・聴覚的効果のテクニック（フジテレビ『とくダネ!』「高1担任教師が入学式欠席賛否」）（2014年4月15日，8：47～8：48）

画面右上のテロップ：息子の高校入学式優先で波紋／高1担任教師が入学式欠席／賛否両論			
カット番号	語り	ヴィジュアル構成	テロップ
1	MC（菊川）： <u>担任の先生が入学式の日になかったらどう思いますか？</u>	（スタジオ）MC3人。カメラ目線。	家庭優先し入学式欠席で賛否
2	ナレーション：一人の教師のとった行動がいま波紋を広げている。	<u>（教室内）黒板、教卓、机、椅子。斜めから撮る（左下が下がり、右上が上がる）。</u>	高1担任教師が入学式欠席賛否（右上）／波紋（右下に大きく）
3, 4	ナレーション：埼玉県内の県立高校でこの春、一年生の担任となった50歳代の教師が、入学式を欠席した。その理由は	（学校）校舎と桜。体育館での入学式の様子。生徒と校長。	1年生の担任教師が入学式を <u>欠席（欠席の文字大きく）</u>
5	<u>音：カーン</u>	（学校）昇降口，日の丸二つ。「入学式」という看板。	<u>息子の高校の入学式に出席するため（真ん中）</u>

たという物語は、大きな組織（学校教育）に自らの生活を奪い取られる者（母親でもある教師）の悲運という対抗物語を生んだのである。ここまでは、インターネットにおいても、ヘゲモニックな物語と対抗物語の拮抗が存在している。

しかし、続いて、他にも同様の教員がいたことが報道され、それが隠されていたことからヘゲモニックな物語はむしろ勢いを増す。

【事例2】中学教師がのど自慢に出演するために参観授業・学校行事を欠席した。（2014年5月17日報道）

これに乗じたと思われるのが、2014年5月17日の毎日新聞の記事である。

中部地方の公立中学校に勤務する50代女性教諭がNHKの番組「のど自慢」に出演するため、担任のクラスの授業参観と学校行事を欠席していたことが関係者への取材で分かった。年休を取っており手続き的に問題はないが、埼玉の県立高校で今春、自分の子どもの入学式に参加するため職場の入学式を欠席した教諭の行動を巡り、賛否の議論が巻き起こったばかり。

この教諭は今春に生放送された番組に出演するため、当日の授業参観やPTA総会、学年懇談会を欠席した。授業は別の教諭が担当した。事前に生徒や保護者への説明はなく、PTA総会では校長が「所用により欠席」と伝えたという。

関係者によると、授業参観の日程は今年1月に決定。教諭はその後、年休を申請し、校長から許可を得ていた。校長は「本人は授業参観と重なったことを気にしながら年休を申し出た。あまり好ましくはないが、許可せず本人の教育への意欲をそぐより、許可した方が教育

に身が入ると判断した」と説明。「生徒や保護者からの不満の声も届いていない」と話している。

中学校がある自治体の教育委員会は「校長が許可したのであれば、それが適切な判断だったと理解している」としている。

ワイドショーもこれを茶化したような演出で取り上げた（表4）。茶化した報道は、ヘゲモニックな解説と交渉的解説との両方に足を置くものである。

これに対して、インターネットの諸サイト（掲示板、ブログなど）では、「別にいいだろう」という否定的意見が多数寄せられた。入学式への出席が、労働者の権利という観点で語られたのに対し、のど自慢報道に対しては、たとえばあるサイト（「痛いニュース」<http://blog.livedoor.jp/dqnplus/archives/1797079.html>）では、公務員の義務を指摘して教師を批判する意見のほかに、「国民の三大義務は勤労、納税、のど自慢だったとおもったが」「のど自慢出演は公務」「生徒だったら、担任がのど自慢出たら自慢だろ」「のど自慢の日に行事を重ねた学校側の責任」といった書き込みが多数寄せられた。これらは、対抗的ではなく、論点をずらしヘゲモニックな物語を認めない言説である。

表4 報道シークエンス(フジテレビ『とくダネ!』「中学校教師参観日を欠席 のど自慢大会」)のカット別データ (2014年5月22日, 8:48~9:03)

右上のテロップ: “子供の入学式” に “のど自慢” / 教師の “学校行事” 欠席はどこまで? / 賛否両論
教師の “学校行事” 欠席はどこまで? / 担任不在で授業参観
中学教師 夢は歌手デビュー / 学校休み “のど自慢” 出演教師 / 授業参観欠席はあり? なし?

	語り (誰が語っているか)	ヴィジュアル構成	テロップ
1	MC (菊川): 中学校の教師が授業参観を欠席。 <u>その理由は、のど自慢に参加するためでした。</u> ^A	(スタジオ) MC3 名。カメラ目線。 小倉がガクッ ^B と肩を落として斜め下を見る。梅津が笑いをこらえた表情になる。	中学校教諭欠席 理由は「のど自慢」(右上)
2	ナレーション: ~省略~ <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;">4月14日の「高校の女性教師が入学式を欠席」を編集して流す</div> ナレーション: 議論を巻き起こしたこの女性教師の行動。		“子供の入学式” に “のど自慢” (右上) / 先月14日放送「とくダネ!」(左上) / 高校の女性教師が入学式を欠席 (下) “ <u>子供の入学式</u> ” ^C に “のど自慢” (右上) / 議論 (左下に縦書) / 女性教師の行動 (右下)
3	ナレーション: では、 <u>この理由で学校を休むのは、どうなのか。</u> ^D 音: カーン	(学校, 教師風景) 黒板, 教卓, 机椅子。右下が下がり, 右上が上がる。ズーム。 上記が白黒になる。	“子供の入学式” に “のど自慢” (右上) / この理由で学校を休むのは? (真ん中下) <u>休んだ理由 “のど自慢”</u> ^E

4	ナレーション：中部地方の公立中学校で行われた授業参観。この日、生徒と保護者の前で教鞭をとったのは、担任の教師ではなかった。 ナレーション（声を変えて） _F ：今日は、担任の先生は欠席です。 ナレーション：授業参観が行われているちょうどその頃、担任の50代女性教師は	参観日の絵	教師の“学校行事”欠席はどこまで？（右上）／公立中学校の授業参観（下） 担任不在で授業参観（右上）／担任の教師ではなかった 「今日は担任の先生は欠席です」担任の50代女性教師は…
5	曲：石川さゆりの能登半島が流れる ナレーション：石川さゆりの能登半島を熱唱 _G していた。（BGMに能登半島） ～以下、省略～	着物姿で歌う女性の姿、こぶし _H	中学校教師 夢は歌手デビュー／♪能登半島 石川さゆり（左下） PTA 総会（右）／学年懇談会（左） 中学教師 夢は歌手デビュー（右上）／鐘2つ（下）
6	当該中学校の校長（電話）		「のど自慢」で授業参観欠席（右上）／のど自慢大会も何十年に1回の出場機会だろうと思えますし（下） ～以下省略～
7	ナレーション：果たして、結果は _I 鐘の音：カン、コン ナレーション：鐘は二つだった。	後姿、左上に光 上記の映像が静止する のど自慢の絵	結果は…？（右下） 中学校教師 夢は歌手デビュー（右上）／鐘2つ（真ん中下）
8	当該中学校の校長（電話）		中学校教師 夢は歌手デビュー（右上）
9	ナレーション		「のど自慢」で授業参観欠席（右上）／授業参観欠席はあり？なし？（右上）
10	ナレーション ナレーション（声を変えて）インターネットの文章（批判の声） ナレーション（声を変えて）インターネットの文章（擁護する声）	インターネット画像	
11	ナレーション：では街の声は。授業参観日に教師がのど自慢に出場するのはあり？なし？ 70代主婦（×「ナシ」） 50代主婦（○「アリ」） 10代大学生男（×「ナシ」）	街の人々	学校休み「のど自慢」出演教師（右上）／授業参観欠席はあり？なし？（右上）／授業参観日に教師がのど自慢に出場アリ？ナシ？（下）

12	都内で聞いた 100 人のアリとナシの人数を円グラフで表示。とくダネ！調べ。	円グラフ。ナシ 60 人。アリ 40 人。	学校休み「のど自慢」出演教師（右上）／授業参観欠席はあり？なし？（右上）
13	60 代女性（○「アリ」）	60 代女性	
14	教育評論家 武田さち子 教育評論家 森口朗		
15	MC, コメンテーター, プレゼンター（スタジオで○×）	（スタジオ）	

【下線 A】参観日の欠席の理由を伝える。小倉さんが反応する。

【下線 B】視聴者の代弁

【下線 C】4 月 14 日のニュースを取り上げる。

【下線 D】「この理由で～」と問いかける。

【下線 E】しかし音声言語はなく、音と白黒に変わった映像とテロップで休んだ理由を伝える。

【下線 F】女性の高い声。

【下線 G】熱唱、夢、歌手デビュー

【下線 H】女性教師がのど自慢で熱唱しているイメージ

【下線 I】視聴者に問いかけ、興味を持たせ、次のシーンで効果音（カン、コン）と映像。粉二つがどういう結果なのかは、視聴者に委ねられる。

この後で、新聞とワイドショーは、のど自慢報道だけでなく、入学式報道についても沈黙することになる。

事例 1・事例 2 では、インターネットがテレビ（上記では新聞も）の外部として脱物語化の作用を果たしている。しかし、インターネットの中でもヘゲモニックな物語は語られるのではないだろうか。実際、新聞のニュースはインターネット版が存在しており、そこでは新聞・対・インターネットという対立は意味を持たない。これについては、次節のような事例を参照したい。

4. 児童置き去り事件をめぐる交渉的解読空間における物語化と脱物語化

本節では、テレビで語られた教育物語自体がそもそも不安定な構造をもっていたものが、テレビの外部によって物語化されるも、交渉的物語空間の中でそれが脱物語化される事例である。

【事例 3】児童置き去り事件に関するテレビと教育評論家が自身のブログにおいて語ろうとした教育物語およびそれへの交渉的解読（2016 年 5 月 30 日）

まず、事件自体は親が「しつけ」のために、山中に子どもを置き去りにしたが、その後現場に戻ると子どもの姿が見えなくなっていたという行方不明事件である。当初、父親は捜索隊員などに事実とは違う説明をしていたが、のちに「しつけ」のためだったと述べた。約 1 週間後、子どもは現場からかなり離れた場所で発見される。

この事件の初期報道を行ったワイドショー番組のシークエンスを表 5 に示した。

表5 報道シークエンス（テレビ朝日『鳥羽慎一モーニングショー』『北海道 置き去り事件』）カット別データ（2016年5月30日，8：00～8：02）

※最初のテロップは「不明 山菜採りはウソ 7歳男児両親がしついで置き去り」

パート	カット番号	カットの概要	誰が	どこで	何を	効果1（情報）： テロップ（一部抜粋）
事件の概要	1-3	山中での搜索	複数の捜査員	山中	搜索する	田野岡大和君（7）の搜索 ●行方不明になって今日で3日 →安否は分かっていない（画面下）
搜索の様子	4-7	夜の山中で子どもを探す	母親，警察官	山中	子どもの名前を呼び，探す	やまと～（画面下）
事件の概要、 搜索の様子	8	ヘリコプターによる搜索	****ヘリコプター	上空	搜索する	
	9	行方不明の子どもの写真	****少年写真	—	—	
	10-12	山中での搜索	複数の捜査員	山中	搜索する	警察と消防など ●約180人態勢で搜索（画面下） “両親の嘘”が判明（画面右下から左へ流れる）
父親の会見	13	父親の会見	父親と記者	車（山中）	記者が父親に質問，父が答える	Q. 山菜採りと言ってしまった理由は？ お仕置きで（捜査に）入るという話をちょっと出すのは（画面下）
置き去りの説明	14	山中	****山中の草木	山中	—	しついで置き去り（画面真ん中）
	15-17	山中での搜索	複数の捜査員	山中	搜索する	警察によると ●両親は大和君が言うことを聞かなかったため山林に置き去りにした（画面下） 警察によると ●両親が5分後に戻った時には大和君の姿はなかった（画面下）
	18	山中	****担架，毛布，ロープ	山中	—	

山中の様子	19	山中 (地面と草木)	****地面, 草木	山中	搜索する	
	20	山中での搜索 (橋と橋の下)	小泉真会長 (七飯 大沼国際観光コン ベンション協会)	山中	電話で説明 する	小さい子なので森の中に入り こんだらどこでも危険で すよね (画面下)
	21	山中での搜索 (川。崖を登 る捜査員)	小泉真会長 (七飯 大沼国際観光コン ベンション協会)	山中	説明する	高い崖もあるので滑落です か崖から落ちるとか (画面 下)
	22	山中での搜索	小泉真会長 (七飯 大沼国際観光コン ベンション協会)	山中	説明する	熊の問題もゼロではないの で… (画面下)
	23	モーニング ショーのイン トロ (番組が 始まるときの 音楽)		—	—	鳥羽慎一のモーニングショー
本事件の 番組がは じまり挨拶、	24	スタジオ, 少 年写真 (写真 下に「しつけ で放置」)	羽鳥, 宇賀	スタジオ	概要を説明 する	

ここでは、親の嘘と子どもに対する行き過ぎた「しつけ」への批判と、両親の過失と子ども自体が巻き込まれた可能性のある事故という両面が語られている。

表6 報道シークエンス (テレビ朝日『鳥羽慎一モーニングショー』「北海道 置き去り事件」) カット別データ (2016年6月6日, 8:14～8:34)

※最初のテロップは「謝るお父さんに大和君は… 街明かりが導いた? 運命分けた“瞬間”」

パート	カット 番号	カットの概要	誰が	どこで	何を	効果1 (情報): テロップ (一部抜粋)
概要の説明	1	スタジオ, 鳥 羽, 少年写真	鳥羽	スタジオ	説明する	謝るお父さんに大和君は… 街明かりが導いた? 運命分 けた“瞬間” (画面下)
	2	少年写真	****少年	—		悪いことしたのは僕だから (画面下)
	3	少年写真, 父 の映像	****少年, 父親	—		お父さん優しいからいいよ (画面下) / 許すよ (画面下)

概要の説明	4	搜索映像(夜)	捜査員	山中	搜索する	「しつけ」で“置き去り”(画面左下)
	5	少年写真	****少年	—		
	6	搜索映像(夜)	****草木	夜の山中		建物に着くまで5時間くらい休まず歩いた(画面下)
	7	自衛隊演習場と施設	****自衛隊の施設	自衛隊演習場		疲れたので建物に入った(画面下)
	8	テロップ	****テロップ	—		大和君5時間の道のりを追跡 運命を分けた“山中の交差点”(画面真ん中)
	9	山の上空からの映像	****木々, 道	山		置き去り現場(画面真ん中)
	10	自衛隊演習場の上空からの映像	****自衛隊の施設施設	自衛隊演習場上空		発見された自衛隊演習場(画面下)
	11-12	小川泰平さん映像	小川泰平	室内		
	13	少年の写真	****少年	—		
少年の現在の状況	14	小川泰平さん会見	小川泰平	室内	説明する	
	15-16	少年の写真	****少年	—		
	17	小学校映像	****小学校	—		小学校の運動会(画面右下)／元々はきのう行われる予定(画面左端)
	18	小学校のグラウンド	****小学校	—		
	19-20	少年の写真	****少年	—		
少年が自衛隊演習場にいたときの様子	21	自衛隊演習場の施設	****自衛隊演習場の施設	—		“置き去り”の7日間についても(画面下)
	22	水道の蛇口	****水道蛇口	—		“置き去り”の7日間についても(画面下)
	23	夜の山中	****草木, 道	夜の山中		
	24	自衛隊演習場の施設の内部	****マット	自衛隊の施設の中		

問題提起	25	夜の山中	****草木, 道	夜の山中		残された謎 (画面右下)
	26	夜の山中, 少年写真	****少年	—		どうやって自衛隊の建物へ? (画面下)
	27-28	山の上空からの映像	****森林	山の上空		検証 (画面左下)
						ある“手がかり”が (画面右下)
	29	搜索写真, 表札, 木々, テロップ	****写真, 表札, テロップ	—		検証 運命の分岐点 (画面真ん中)
検証 (少年置き去り現場から少年発見現場までの道筋)	30	アナウンサーによる説明	アナウンサー	山中	説明する	置き去り現場と発見現場を示した地図 (画面右下)
	31	アナウンサーとガイドが置き去り現場から歩き始める	アナウンサーとガイド	山中	説明する, 歩く	
	32-34	アナウンサーとガイドが山道を歩く	アナウンサーとガイド	山中	説明する, 歩く	
	35	ゲート	****ゲート	山中		一般車両通行止め (画面下)
	36	アナウンサーとガイドがゲートを確認	アナウンサーとガイド	山中	ゲートの確認	
	37-47	アナウンサーとガイドが山道を歩く	アナウンサーとガイド	山中	説明する, 歩く	
	48	分岐点からの景色	****草木, 雲	分岐点		
	49	デジタルマップによる道筋	****デジタルマップ	—		
	50	アナウンサー (午後7時20分) と高台からの風景	アナウンサー	山中の高台	風景を確認する	
	51	上空からの写真と道筋	****森林, 道	山中		自衛隊演習場, 樹海, 噴火口 (その場所に表示)
	52	小川泰平さん会見	小川泰平さん	室内	説明する	
	53	上空からの写真	****森林, 道	山中		

検証 (少年置き去り現場から少年発見現場までの道筋)	54	少年の写真	****少年	—		
	55-57	アナウンサーとガイドが山道を歩く	アナウンサーとガイド	山中	説明する, 歩く	
	58	上空からの写真	****森林	山の上空		
	59	アナウンサーとガイドがゲートに着く	アナウンサーとガイド	ゲート前	説明する	演習場に入るゲート (画面下)
	60	立入禁止の看板	****看板	山中		
	61	デジタルマップでルート確認	****デジタルマップ	—		
	62	アナウンサーが温度と湿度計を確認	アナウンサー	夜の山中	説明する	
	63	小川泰平さん会見	小川泰平さん	室内	説明する	
	64	自衛隊演習場に人が集まっている映像	大勢の捜査員と取材陣	自衛隊演習場	検証, 取材している	
	65	少年の写真	****少年	—		
他局のニュース、インタビュー	66	アメリカCNNのニュース	アメリカ人アナウンサー	スタジオ	ニュースを読む	
	67-68	英語のインターネットニュース	****インターネット	—		海外ニュースでも報道 (画面下) “置き去り” は虐待— (画面左上), 厳しい目 (画面右下)
	69	アメリカ人のインタビュー	アメリカ人	銀座	発言・返答する	
	70	フランス人のインタビュー	フランス人	銀座	発言・返答する	
他の置き去り事件	71	金沢駅前	****金沢駅	金沢駅前		石川県金沢市5月23日, 7歳男児が車から降ろされ置き去りに (画面下)
	72-75	山中の映像	****森林	金沢の山中		約3時間にわたり行方不明に (画面下)

他の置き去り事件	72-75	ディレクターが山道を歩く	ディレクター	金沢の山中	説明する、歩く	
		山中の映像	****森林	金沢の山中		
インタビュー	76	街頭インタビューの映像	4人家族	街頭		しつけの境界線は（右下）
	77	街頭インタビューの映像	母と息子	街頭		しつけの境界線は（右下）
	78	30代男性 街頭インタビュー	30代男性	街頭	発言・返答する	
	79			街頭	発言・返答する	
	80	9歳の子どもを持つ母親街頭インタビュー	女性	街頭	発言・返答する	
現在の状況	81	父親の会見	父親	建物の前	発言・返答する	
	82-83	函館の病院	****病院	函館		
	84	少年写真	少年	—		
事件概要	85	スタジオでのトーク。鳥羽，宇賀，飯村（アナウンサー），コメンテーター3人。以下，省略。		スタジオ	説明する，意見を言う	

約1週間後，少年が発見された際のワイドショーの報道シークエンスは表6に示した。

こうしてワイドショーの報道は，無事発見の安堵感を中心に，父子愛と，事件に残された謎を周囲に配置している。虐待については海外の基準として捉えられていることもわかる。

これに対して教育評論家が自身のブログにおいて語ろうとした教育物語は次の通りである（2016年5月30日）。

（本人のブログは削除されているため別の報道による）

教育評論家の尾木ママこと尾木直樹氏（69）が30日、「良い躰（しつけ）、悪い躰の見分け方」とのタイトルでブログを更新し、北海道で発生した父親らが児童を山中置き去りにした事件について「虐待です」と断罪した。

尾木ママは、児童の父親が「しつけだった」と話していることを念頭に、子どものしつけについて言及。「今回の北海道の山中放置事件・悪いしつけの見本です…虐待です。虐待とは『子どものためといいながら、親の気持ちを満足させるため』子どもが納得していないのに恐怖や痛みを与え従わせるのは悪いしつけ」とつぶった。

そして「良いしつけとは、なぜいけないのか、どうしてあいさつが大切なのか…意味や理由を分からせながら教えていくことです…機械的、訓練的な方法だと思春期に簡単に崩壊しますよ。7歳なら言葉の力で伝わりますよ」と説明した。

最後には「叩いてでもしつけるのは完璧な間違いですよ!!」と訴えていた。

(スポーツ報知 2016年 5月 30日 14時 57分

<http://www.hochi.co.jp/entertainment/20160530-OHT1T50110.html>)

本来はブログ記事であるが、それを取り上げた新聞記事もまた(より)ヘゲモニックな物語を語っている。

5月31日には、「北海道の放置親に同情する方々に聞きたい」と切り出し、両親への批判を展開。最終的には、保護責任者遺棄罪などを踏まえてなのか、「(両親は)警察にも間違いなく逮捕されることでしょうね」とも断言していた。

尾木氏の「放言」はまだ止まらない。男児の発見を喜んだブログ記事を更新する約8時間前、6月3日未明には「(自衛隊の捜索でも見つからないなんて)はっきりいってあり得ない」と持論を展開。「置き去りそのものが真実なのか失礼ながら疑いたくなってしまう…」と疑問を投げかけていた。(http://www.j-cast.com/2016/06/03268684.html)

しかし、男児が無事発見されると、当ブログは更新され「こんなにほっとしたことも珍しい! 合同捜査本部解散のニュースに落ち込んでいた尾木ママ いきなり元気 元気!!」と書かれる。これに対して、インターネットでは「謝罪が先だろ」という批判が殺到した。

ブログの「炎上」の事態収拾のために、教育評論家は6月5日にブログを更新し、「完全に行き過ぎ、失礼でした」と謝罪した。6日にはTBS「白熱ライブ ビビット」に生出演し、親の行動に疑念を示したことについて、2日間で100万件以上の批判が寄せられていたことを明らかにした。(http://www.huffingtonpost.jp/2016/06/06/naoki-ogi-was-critisised_n_10316904.html)

他方、教育評論家の当初の判断を支持する意見も多く寄せられ、炎上を疑問視するサイトも現れた(http://blogos.com/article/178708/)。

ここで起きていることは、最初の物語(置き去りという虐待行為をした親を悪として告発する教訓物語)を、教育評論家が別の物語(苦難にあった子どもが機転で生き延びる物語)に転換させたことに対して、言うことをコロコロ変える口達者な嘘つきを懲らしめるというメタ物語が語られた。またそのことに対して、物語化を避けようとする一連の動き(ただし対抗物語も含まれる)が起きた、という事態である。さらに、たとえば、それに便乗したように教育評論家の講演料について報告したブログが現われる(http://et-news.net/oginaoki)。

おわりに

冒頭に述べたように、テレビは、「想起＝アナムネシス（ἀνάμνησις）」のメディアである。これは、物語の起動の際に過去の経験の動員というかたちで起こる。これは個人の体験を呼び起こすような仕掛けでもあるし、また、ワイドショー内で過去の事件の年表を提示して視聴者のあやふやな記憶を参照させるかたちでもなされる。

しかし、一方で、テレビは「忘却＝アムネシア（ἀμνησία）」のメディアでもある。教育事件の細部はすぐに忘れられ、そこでの物語的なカタルシスの記憶が残るだけである。

これに対して、インターネットは、情報の蓄積と参照の、すなわち「記憶＝ムネーメ（μνήμη）」のメディアである。たとえブログや新聞記事で更新されて消去されたものでも、引用によって生き延びる。プライバシーにかかわって悪用・乱用される問題も確かに深刻ではあるが、脱物語化という観点からは、極めて有用な仕組みである。

そこでは、ゲシュタルト化されない諸断片の相互参照と、それによって生まれる新たな諸物語化が起こる。ヘゲモニックな物語であったものは、過去の物語と比較され、差異化され、プロットと結末とが再類型化される。あるいは類似の事件が検索や投稿によって呼び起こされ、結果として物語の統一性ばかりか単一性も損なわれ、カタルシス作用は不完全なものになってしまう。こうして交渉的解読空間は、テレビの教育物語のヘゲモニー性を突き崩すことができると考えられる。

とはいえ、脱物語化作用と批評的な機能を期待するには、インターネットはまだあまりにも統制されていないメディアである。設計の思想、アーキテクチャの構築が今後いっそう必要になる。しかし、その方向性について定まった見解はない。

テレビの教育報道の脱物語化の観点からは、インターネットのアーキテクチャの基本的条件は、交渉的解読が保証されること、脱物語化を有効に機能させることである。ここでは、理想的発話状況（ハバーマス）や、熟議空間（フィッシュキン）、様々なタイプの参加型民主主義のような高いハードルを設ける必要はない。脱物語化という認識あるいは「啓蒙」のメディアとするだけで十分である。

現在テレビは、インターネットという「対抗圏」を意識せざるを得なくなっている（インターネット動画を編集した番組、視聴者の意見をリアルタイムでテロップ化するしくみ等）。むしろ、テレビの物語独占（mono-narrative）に対して、交渉的解読空間を、対抗的解読ではない対抗圏として位置づけていくことが有効になると考えられる。

註

- 1) 本稿で用いられる「教育報道」「教育事件」「教育物語」などの用語については、加藤・紅林・越智・酒井 2016 を参照。
- 2) ここで挙げたテレビの教育報道における各種儀礼とそこに用いられる想起装置については、稿を改めて論じる予定である。
- 3) フロイトの夢分析（Freud 1900）における重層決定の概念を参照。
- 4) 対抗的物語ではなく、物語の交渉的解読こそが、対抗的なものになるという点に注意されたい。

文献

- Anderson, Benedict, 1983, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. (= 2007, 白石隆・白石さや訳, 定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行, 書籍工房早川.)
- Assmann, Aleida, 1999, *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des Kulturellen Gedächtnisses, dritte auflage*, C. H. Beck. (= 2007, 安川晴基訳, 想起の空間—文化的記憶の形態と変遷, 水声社.)
- Derrida, Jacques, 1967a, *La Voix et le phénomène: introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*. (= 2005, 林好雄訳, 声と現象—フッサール現象学における記号の問題への序論, 筑摩書房.)
- , 1967b, *De la grammatologie*. (= 1972, 足立和宏訳, グラマトロジーについて 上・下, 現代思潮社.)
- , 1967c, *L'écriture et la différence*. (= 2013, 合田正人・谷口博史訳, エクリチュールと差異, 法政大学出版局.)
- Fiske, John and John Hartley, 1978, *Reading Television*, Methuen. (= 1991, 池村六郎訳, テレビを〈読む〉, 未来社.)
- Foucault, Michel, 1994, *La naissance de la médecine sociale*, en édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald, *Michel Foucault: Dits et Ecrits*, Gallimard. (= 2006, 小倉孝誠訳, 社会医学の誕生, 小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編, フーコー・コレクション 6 生政治・統治, 筑摩書房 (ちくま学芸文庫), 165-200 頁.)
- Halbwachs, Maurice, 1950, *La mémoire collective*, Albin Michel. (= 1989, 小関藤一郎訳, 集合的記憶, 行路社.)
- Hall, Stewart, 1980, "Encoding / Decoding" in S. Hall, D. Hobson, A. Lowe and P. Willis eds. *Culture, Media, Language*, Routledge, 128-138. (→ 1993, Simon During ed., *The Cultural Studies Reader*, Routledge, 90-103.)
- 加藤隆雄・紅林伸幸・越智康詞・酒井真由子, 2016, 擬似出来事の世界作用とその〈外部〉—テレビにおける教育報道の脱物語化—, アカデミア 人文・自然科学篇 第12号, 37-52.
- 北澤毅, 2015, 「いじめ自殺」の社会学—「いじめ問題」を脱構築する, 世界思想社.
- Lessig, Lawrence, 2006, *CODE VERSION 2.0*, Creative Commons. (= 2007, 山形浩生訳, CODE VERSION 2.0, 翔泳社.)
- Lippmann, Walter, 1922, *Public Opinion*, Harcourt. (= 1987, 掛川トミ子訳, 世論 (上・下), 岩波書店 [岩波文庫].)
- 永田浩三, 2014, NHK と政治権力 番組改変事件当事者の証言, 岩波書店 [岩波現代文庫].
- NHK 放送文化研究所, 2016, データブック 国民生活時間調査 2015, NHK 出版.
- 酒井真由子・越智康詞・紅林伸幸・加藤隆雄, 2016, テレビのメディア・バイアスと教育世論の形成—教員報道／少年報道から見てくるもの—, 信州大学研究紀要, 信州大学, 27-47.
- 佐藤毅, 1990, マスコミの受容理論 言説の異化媒介的変換, 法政大学出版局.
- 山腰修三, 2012, コミュニケーションの政治社会学—メディア言説・ヘゲモニー・民主主義—, ミネルヴァ書房.
- 吉田文彦, 2008, ニュース映像分析の手法—ビデオ編集ソフトを使ってみる, 小玉美意子編, テレビニュースの解剖学 映像時代のメディア・リテラシー, 新曜社, 96-118.

本稿は、日本教育社会学会第68回大会（2016年9月18日 於・名古屋大学）【課題研究2】「現代社会におけるメディアと教育—メディア環境の変容は教育をどのように変えようとしているのか—」における報告（加藤隆雄「教育報道の脱物語化と交渉的解読空間のアーキテクチャ」）の資料に加筆し、新たにデータを加えたものである。3節は加藤および酒井が、それ以外は加藤が執筆を担当した。また、本研究は、科学研究費（基盤研究（A）課題番号25245075「テレビメディアにおける言説・映像空間の特性と教育世論の形成に関する実証的研究」平成25年度～29年度）の助成を受けている。